



〈書評〉

宮本雄二監修 日本日中関係学会編 日本僑報社

『日中外交関係の改善における環境協力の役割——学生懸賞論文集（若者が考える「日中の未来」Vol.3）』

（アジア経済研究所）大塚 健司

本書は、日本日中関係学会が2016年度に募集した学生懸賞論文集である。最優秀賞2本（「学生の部」1本、「大学院生の部」1本）、優秀賞6本（同各3本）、特別賞7本（「学生の部」4本、「大学院生の部」3本）が選ばれ、それら15本がすべて収録されている。この学生懸賞論文は、学会長の宮本雄二元中国大使の名前を冠して「宮本賞」とされており、「若い世代の皆さんが日本と中国ないし東アジアの関心に強い関心を持ち、よりよい関係の構築のために大きな力を発揮していただきたい」として、「そのための人材発掘・育成を目的として2012年からスタート」したとされている（p.218）。本書に収められたのは第5回受賞論文である。本稿執筆時点ですでに2017年度の受賞論文集も発刊されている。

本書のタイトル「日中外交関係の改善における環境協力の役割」は、巻頭に掲載された苑意（東京大学教養学部3年）と李文心（同経済学部3年）の共著による同テーマ（サブタイトルは「歴史と展望」）の「学生の部」の最優秀賞受賞論文である。次に掲載されているのは「大学院生の部」の最優秀賞論文「21世紀中国における日本文学翻訳の特徴——文潔若『春の雪』新旧訳の比較を通して」（楊湘雲・北京第二外国语学院日本語文学研究科卒業生）である。宮本賞のテーマは「日本と中国ないし東アジアの関心に関わる内容の論文、レポート」であり、「分野は政治・外交、経済・経営・産業、文化・教育・社会、環境、メディアなど幅広く設定されて」いる（まえがき）。本書収録の論文テーマも、本書タイトルのもの以外に、日本文学、

メディア、企業・産業、草の根交流、国際政治経済、歴史認識など多岐にわたっている。よって本書が日中環境協力についての論文集でないことに注意が必要である。本書のタイトルが、あくまで最優秀賞論文の一つであることは、本のカバーの片隅にでも明記しておくほうが、本書シリーズを初めて手にとる読者に対して親切であろう。

評者は、拙稿「持続可能な東アジアのための人間の安全保障を求めて」（天兎慧・李鍾元編『東アジア和解への道——歴史問題から地域安全保障へ』岩波書店、2016年所収）の最後に「東アジアに生きる比較的若い世代が将来の持続可能な地域を展望できるような『東アジア未来可能性ビジョン』を域内外の関心を持つ人々とともに構想していくような取り組みを試みてはどうだろうか」と書いたことがある。2012年からスタートした宮本賞はまさにその試みのひとつであり、不覚にもこの賞のことに触れなかったことを恥じるばかりである。

本書が通常の学術書とは異なり、多彩なテーマから成る懸賞論文集であることから、全体を通して論評することは紙幅の制約も勘案して大変困難である。ここでは、巻頭論文についていくらか論評を加えつつ、中国研究・日中関係に広く関心を持つ一研究者として、全体を通読しての若干の感想を述べるにとどめたい。

巻頭論文は、「一、日中環境協力の必要性」、「二、日中韓協力の経緯」、「三、展望」の3節から構成され、一、二ともに先行研究や公表資料にあたって日中環境協力の背景・経緯・成果などが手堅くまとめられており、三において筆者らの見解が明快に論じられている。特に三において、筆者らが提案するアプローチの第一として、「日中両国の環境協力関係の健全化を図らなければならず、そのためには、「日中両国間でコストの分担や利益の分配が公平な形」でなされるべきと提起していることが注目される（p.13）。この点については、

(42)

中国が経済大国として台頭してきたことにより、実際に技術協力や比較的少額の無償資金協力が継続されている日本の対中ODAをめぐって現在両国間で模索されているところであり、そのことの重要性を的確に指摘したものである。

また、「政府を含めた多層で多様な関係者間で、お互いの意図を確認し理解するための政策対話が、絶対不可欠であろう」として「地方自治体や企業、学術研究機関、NGOなども両国間の環境協力の主要な担い手であり、これらの主体が提携関係で結ばれ、環境分野における両国の民間交流活性化の担い手となることが期待され」、それによって「両国の関係者の頻繁な相互訪問と共同活動の積み重ねによって、互いに対する理解をより一層促進することができる」（p.14）という主張については、日中環境協力に携わる関係者の多くに共有されている重要なポイントである。そして最後に、環境協力が外交改善に果たす役割という本論文のテーマに立ち戻って、「日中両国は歴史問題と領土紛争に拘るべきではなく、環境問題の解決を伝統的な安全保障問題と同格なレベルに格上げ」することを提案している（p.17）。評者は複数の日本の実務担当者から、これまで両国間で政治対立が幾度となく持ち上がっても環境協力がなんとか継続できたのは、それが伝統的な安全保障問題から見てマージナルな領域であったからである、と聞いたことがある。これに対して筆者らの主張は、環境協力が外交改善に力を持つには、そうした消極的な捉え方を越えて政治的な格上げが必要であるということになる。しかし、環境協力が外交カードとして使われることになれば、他の案件をめぐり政治状況次第で、環境協力が停滞することもあり得るのではないかと、という新たな論点も浮上する。この点についてはさらなる議論が求められるところである。

全体を通して感じた傾向として、第一に、すべての論考が最近の両国をめぐり経済・社会の変化

に敏感に反応して、そこから日中関係の未来を展望しようとしていることである。例えば、日本文学の翻訳問題を専門的に考察した「大学院生の部」の最優秀賞論文においても例外ではない。筆者の楊は、「麴町」という地名について、旧訳では「麴」の音に近い「曲」を使って「曲街」としていたのを、新訳ではそのまま使っている例を挙げ、近年の翻訳に日本語の漢字をそのまま当てて訳注が付けられていること背景に、「近年、日本へ旅行する中国観光客が多くなり、日本と中国との交流が深まるにつれて、中国人は次第に『町』という字に馴染んできた」と指摘する（p.30）。そして、このような変化が、日本に対する理解をより深めることにつながると展望している。

第二に、両国をめぐり最近の経済・社会の変化に対して、表面的な理解ではなく、その背景についての多角的な考察を試み、そこから一般にはあまり気づかれていない論点を提示していることである。例えば、優秀賞となった李坤（南京大学外国語学部博士課程前期2年）による「中日におけるパンダ交流の考察」では、日中友好の「使者」とされてきたパンダが、贈与からレンタルになったことで、日本の世論において様々な批判がなされていることを取り上げている。そして、商業的な目的による絶滅危惧種の国際取引を禁じるワシントン条約の存在や、レンタル料の使途にパンダの保護やそのための研究費が充てられていること、さらに日本国民がパンダに持つ特別な感情などに触れて、パンダが今度も日中両国の「関係改善の助力になるには、パンダを受容する社会的雰囲気醸成が必要」と指摘する（p.105）。日中関係が複雑化するなか、両国間でしばしば誤解や疑心暗鬼が生じることがあるが、それを克服して協調関係の維持・構築を図っていくには、このような冷静な分析を踏まえた相互理解がより一層求められるところである。

（2017年3月刊、280ページ、本体3,000円＋税）